

I-2 フライアツシ使用に關する二、三の考察

東京電力KK 奥利根水力建設所 (正) 飯島延恵
(正) 岩橋 亘
○ (正) 長坂普美夫

この数年來コンクリートの混和材としてフライアツシの認識が深められ、この需要は年と共に急増して來た。元來火力発電所の煙突より飛散するフライアツシは廢棄処理に多額の費用を要し、その上近年火力発電所の大容量化に伴う降灰が重大問題となりつゝある時、加ゾランとしてのフライアツシは新しい工事材料として逆に火力発電所の有用なる副産物となった。しかしながら加ゾランとしてのフライアツシにはまだ研究すべき幾多の問題があり、当社としても国際大ダム会議国内委員会のフライアツシ分科会の一員としてその研究結果を報告して來たのであるが、この昭和29年7月よりは全国始めてのこゝろみとして須田貝ダムのコンクリートにフライアツシを混入し中熱セメントと併用してコンクリートの品質の改良はもとより、莫大なる工事費の節約に成果を納めて來た。

以來全国各地のダム工事に於てフライアツシの進出はめざましく日本のダム工事に一大改革をもたらしつゝある、当社に於てもその後全土木工事にフライアツシの混入を採用して居るのであるが、その使用範囲の拡大に伴い現場コンクリートの品質管理に重負をおき、練り上りコンクリート及び打込まれた後のコンクリートについて究明して來たのでその内特にダムの様な硬練りの場合及び鉄筋コンクリート、隧道ライニング等の比較的軟練りの場合及びコンクリートプーラー、コンクリートポンプ等を使用した場合にフライアツシの混入がこれ等のコンクリートの性質に如何なる影響を及ぼすかについて二、三の考察をしたい。

